
ぱらのいあ

楸由宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぱらのいあ

【コード】

N5963R

【作者名】

楸由宇

【あらすじ】

1997年から2002年ぐらいまでに書きためた一つの目の短編集。殆どが1000文字以下のショートショート。

犬。

その男は、数日前からこのあたりで噂になつていた。薄汚れた緑色の上着を着て、黒いゴムの長靴をはいて、スコップを右手に、左手には、紐で一行につないだ十数匹の小犬を連れてこの町を歩き回っているという噂だった。その男を見たことのあるものは、誰もいなく、いつからこのあたりに現われたのかもわからなかった。ただ、黙つてついてくる小犬を連れて、このあたりを歩き回っていた。誰もその男が何をしているのか知らなかった。

その男が、うちの庭に現われたとき、僕は不思議と少しも驚くことはなかった。僕は、ちょうどそのとき、居間でソファアに座つてテレビを見ていた。僕の座つていたところからうちの庭はよく見えた。居間の窓は、南側を向いている大きいものと、少し小さめの東を向いたものがある。うちの庭は東側から南側にかけてかなり大きくとつてあり、僕が小学校に入学したときに植えた桜の木が南東の隅に、また、数年前に比べてかなり小さくなった花壇が塀に沿つて南側にあつた。僕が座つているソファアからは庭のほとんどが見えた。庭に誰かが入つてきたので外を見ると噂の男だった。その男は、噂通り、緑の上着にスコップをもつて小犬たちと現われた。男が入つてくるところは見えなかったが、たぶん、うちの北側で少し塀が崩れたところから入つたのだろう。

早く塀の修理を頼まなくては。

僕は、ソファアに腰を下ろしたまま男を眺めていた。男は、何も悪いことをしそくに思わなかったからだだった。その男は、庭に入つてくると少し立ち止まり、庭を見回した。そして、そろそろ立派に成長した桜の木に連れてきた小犬たちをつないだ紐を括りつけ、スコップを持ちながら庭をうろろ歩き始めた。時々、立ち止まり少し考えるようにうつむき、また歩き出す。そんなことを10分も続けていただろうか、突然、男は僕の正面、数年前に花壇があつたと

ころあたりに背中を向け立ち止まり、地面にスコップを突きたてた。昔、花壇があつたせいとそのあたりは土が柔らかく男はあつという間に、深さが50センチ程の丸い穴を掘りあげてしまった。穴の直径も50センチぐらいで、穴を掘ったときに出た土は脇で山になっていた。

何をしているのだろう。

穴を掘り終えた男は、桜の木のほうへ歩いて行き、小犬たちを眺めたあとおもむろに茶色い毛の小犬を1匹抱えあげ、紐をほどいた。小犬を抱いた男は、さっきの穴まで来ると小犬を穴のなかへほうり投げて入れた。僕は、ソファから腰を浮かせて、立ち上がるうとした。

何をする？

男は、急にこちらを向いた。僕は男と眼があつた。不思議な瞳だった。しかし、光が感じられなかった。死んだ眼だと思つた。瞳に穴があいたようだと思つた。普通の人間ではなかった。

気付いていた？

男は、僕がじつと見ていることを知つていた。僕は、再びソファに腰を下ろした。男は、前を向き、何事もなかったように作業を再開した。男は、小犬の頭だけを地面の上に残したまま丁寧に体を埋め始めた。男は、土で小犬の体を埋め終わると、緑色の上着のポケットから小さな粒を2粒ほど取り出して、小犬の頭の脇にそつと埋め込んだ。そして、庭の脇にあつたじょうろを持ってきて窓のすぐ脇にある水道の蛇口から水をじょうろに入れ始めた。そして、男は、小犬の頭に水をかけ始めた。しかし、小犬は、何も騒がなかった。ただ、じつと男を見つめていた。男は、水をやり終わると、じょうろを元の場所に戻した。スコップを手にして、残つた小犬たちを桜の木からほどくと男は、庭から出て行こうとした。男は僕の視界から消えてしまう瞬間、急に立ち止まり再び僕のほうを見た。男の口元が動いた。

”.....”

僕は、男が何と聞いたのか聞き取れなかった。そして、男は庭から出て行ってしまった。僕は、しばらくソファから動けなかった。次の日、変化が起こっていた。犬の首が伸びている気がした。昨日、男がいなくなってから、僕は、小犬を見ることはなかった。しかし、小犬の首が伸びているのは間違いなさそうだった。もう一日たつとはつきりとわかった。小犬の首が伸びている！しかも、頭のとっぺんから植物の芽のようなものが生えてきていた。そのころ、僕は、新しいうさを聞いた。男が小犬をこのあたりの家の庭に埋めて歩いていたというものだった。男は最初、小犬を埋める家を探していたのだ。三日目、小犬は１メートル近くに伸びていた。もうすでに小犬の頭だったとは見えなくなっていた。どう見ても木にしが見えなかった。僕は小犬だったものに水をかけてみた。五日目、雨が降った。小犬の頭だったものは、うれしそうに揺れていた。また伸びるのが速くなった気がした。十日目、かなり”犬の木”は大きくなった。家の屋根より高くなってしまった。そして、町中に見慣れない木が増えつつあった。それらは、どう見てもただの木だった。しかし、時々、思い出したようにそれらの木の幹が脈打っていた。

あの男はいったい誰だったんだろう？

そう思わずにいられない。不思議な木をこの町に残していった男。結局、僕のいえに小犬を埋めていった日から、その男は見かけられることはなかった。

再び変化が現われたのは、あれから一月もたったころだった。木に何かが実りつつあった。それが小犬であるとわかるまで時間はいらなかった。実り初めて、2日もすれば、その小犬たちが動いているのがわかった。小犬たちは、頭のとっぺんで木の枝とつながっていた。木に実っている小犬というものは不気味なものだ。そして、3日目には、小犬たちは、”犬の木”から落ち始めた。木から落ちた小犬たちは、しばらく木の下で走り回っていたが、そのうちいなくなつた。そんなことが町中の”犬の木”で起こっていた。

枝から落ちた小犬たちは、どこへいったのだろうか。

そのうちに、町中を小犬が走り回るようになった。”犬の木”に実った小犬たちだった。そして、”犬の木”は、増えていた。この町で、”犬の木”が増えていた。勝手に増えているのだ。

あの男は、この町にはもういないはずなのに。

つまり、”犬の木”が増えているのは、”犬の木”に実った小犬たちが新しい”犬の木”になっているからだだった。あの小犬たちは、”犬の木”の種だった。この町は、小犬と見慣れぬ木で埋め尽くされつつあった。道には、小犬があふれ、ちよつとした空き地には、”犬の木”が生えていた。ただ、この小犬たちは、吠えなかった。

もし、小犬たちが吠えていたら、僕らは、耐えられなかっただろう。半年もたたないうちに、予想通り、この町は”犬の木”で埋め尽くされてしまった。その間、住民はなにも手を打たなかったわけではない。しかし、”犬の木”は、切つても切つてもきりがないのだ。”犬の木”を切る速度よりも、小犬が実り、”犬の木”となって増えるほうが早かった。それほど、犬の木の増える速度は、速かった。何故なら、一本の”犬の木”に小犬が一度に十数匹も実るのだ。小犬をつかまえることも試したが、全てを捕まえるのは不可能だった。もう、僕らにはなすすべは残されていなかった。そして、いつの間にか、この町は”犬の木”で埋め尽くされていた。僕らも、あきらめつつあった。町は、小犬と”犬の木”であふれた。いつのころからか、この町は”犬の木の町”と呼ばれるようになっていた。

あの男はいったい誰だったんだろう？

あの男の目的はいったいなんだったんだろう？

そして、あの”犬の木”はいったい何だろう？

最近、僕はこのことばかり考えている。でも、僕には、答えはわからない。あの男の居場所すらわからない。たとえ、僕らが、あの男の目的を知ることができても理解することは不可能だろう。あの

男は、人間ですらなかったのかもしれない。でも、僕が一つだけいえることは、あの男は、今もどこかで小犬を埋めているだろうということだ。そして、あの男は今も”犬の木”を増やし続けている。僕はそう信じている。たぶん、それは真実なのだ。

だから、今もどこかで確かに、”犬の木”は増え続けている。

右と左

右に大きな月が出ていた。あれから、ずっと歩いてきた。そろそろ休んでもいいころかなと思う。でも、まだ、歩き続けたい気もする。動いていないと、何だか落ち着かなかった。やっぱり、まだ歩き続けようかと思う。右にある大きな満月を見ながら、私はあのときのことを思い出していた。思い出したくないのに、勝手に心に浮かぶあの光景。まだ、その事実を受け入れるには早い気がする。その事実を認めることはできなかった。いや、認めたくなかった。そのことを認めると私が私でなくなる。

しかし、こんなことが起こることはわかっていた。でも、こんなに早く、自分の身に降りかかることは思っていなかった。そんなことはまだまだ、ひとごとだと思ってきた。私が、そのことを受け入れられるようになるのはいつだろう？

私にはまだわからない。

右にあった月も徐々に低くなってきた。そろそろ、明るくなるころかなと思う。いったいどこまで歩けばいいのだろう。

その事実に向面したとき、私は受け入れることを拒んだ。受け入れられるかわりに、その事実から逃げ出すことを選んだ。その事実を認めるのがこわかった。心のどこかでは受け入れなくてはと思う。でも、別の部分では受け入れるなと叫んでいる。その事実を受け入れたら、自分が壊れてしまう気がした。こうして街から、離れて一人で歩いていても受け入れることはできなかった。ずっと苦しかった。この気持ちを何とかしたい。どうすればいい？

起こったことを事実として受け入れてしまえば、楽なのだろう。でも、できなかった。心が、自分が、失われるのが悲しいから。

右にあった月もだいたい沈んでしまった。やっぱり休もう。太陽が昇ってきたら。歩き初めて、一カ月。そろそろ休んでもいいころかもしれない。あまり疲れていないけど、どうせ体はないんだ。少し

休めば、まだ一月ぐらい歩いていられるさ。あの事故を、自分の死を受け入れさえしなければ。

そろそろ、左に太陽が見えてくるだろう。少し休んだら、また歩き出そう。まだ迎えは来ないだろう、自分の死を受け入れなければ。

痒い

ワタシの身体には、二匹の蚤が住んでいた。彼等は、とても小さくて、ワタシは何時も何十分もかけて彼等を探さなくてはいけない。ある時、一匹の蚤、名前はサナエと言う、がワタシにこう言った。

「もしもし、ケンジさん。痒いところはありませんか？」

ワタシは、その時痒い所が無かったのでサナエにこう答えた。

「今は、痒いところは無いんだ。だから痒いところがあったら言うのでその時に頼むよ。」

サナエは頷くとまた何処かへ消えてしまった。ある時、背中が痒くなったのでサナエを呼んだ。すると、今度は二匹ともワタシの手の平の上に出てきた。もう一匹の名前はシンヤと言う。

「背中が痒いので掻いておくれよ。」と言うと、二匹はワタシの背中を掻いてくれた。それがあまりにも気持ちよかったので、ワタシは病み付きになってしまった。それ以来、十五年間ワタシは、一時も欠かさず蚤を飼っています。サナエとシンヤの子孫も、今は二十五代目。今は、ワタシの身体には、二十五万六千八百八匹の蚤が生息しています。あなたもお試してください。身体が痒い時は蚤が一番ワタシはそう信じています。

抜け殻

男は、何かを踏んで滑って転んでしまった。だが、男はそれどころではなく、急いでトイレの中へ駆け込んでいった。

数分後、すつきりしてトイレから出てきた男は足元に片方だけの手袋が落ちているのに気が付いた。茶色の男物の手袋で左手用の物だった。

二、三歩歩いてまた手袋が落ちているのに気が付いた。今度は右手だった。男は不思議に思った。

わざわざ両方の手袋を落としていくとは…。

廊下の角を左に曲がり、次に見つけた物は、黒い帽子。やはり男物。次に見つけた物は、黒いロングコート。次は、右足の黒い革靴、ダークグレーのスーツの上着、左足の革靴、右足の靴下、階段の前にネクタイ、階段の踊り場に白いワイシャツ、二階の廊下にダークグレーのズボン、高そうな腕時計、メガネ。落ちている物をたどって歩いてきた男はそろそろ最後だろうと思った。そしてある部屋の前に左の靴下が落ちていた。

これで最後はパンツだけになった…。

男は、周りの様子をつかがうとドアをそつと開けて中を覗いた。部屋の中は薄暗かった。目を凝らしよく見ると、なんとそこで男が見たものは、

雨

昨日から降り続けている雨音がふと聞こえなくなった。私は、カーテンを開けて外を見た。少し曇った窓ガラスの向こう側は明るい空が広がっていた。私は、窓を開けて外の空気を部屋に入れた。冷たい空気が淀んだ部屋の中の空気を洗ってくれるようだった。一晩中、雨の音を聞きながら悩んでいたことがとてもくだらなく思えた。さっきまでの雨がうそのように空は青く晴れ渡っている。私は外を歩くことに決めた。はきなれたLevi'sと、白いHanesのTシャツを着て私はドアを開け部屋を出た。玄関から出ると外は明るかった。

いつも大学に行く道をゆっくりと歩きながら、私はこんなにいい天気の日曜は、しばらくなかったことに気が付いた。見慣れた山の上を流れていく白い雲をぼんやりと眺めながら、私は昨夜のことを思い出していた。川を通りすぎたとき、私は昔の友人を川岸の向こうに見かけた。彼は、私に気付き手を振ってきた。彼は昔の私しか知らない。今の私や、私がやってきたことを知らない。それらを知れば彼はどう思うだろう。そんなことを考えながら、私は彼に向かって大きく手を振った。

私が初めて手を下したのは、ちょうど一年前だった。相手は、昔から嫌いだった中学時代に同級生だった男だ。チャンスはふとしたときに転がり込んでくる。階段から落ちた奴は、呆気なく死んでしまった。不思議と感想はなく、ただすっきりした気分だった。あれから一年、私の嫌いな奴は皆、私の前から姿を消していった。私にいつも暴力をふるっていた高校時代の担任、近所の口うるさい主婦、うつつとうしくなってきたあいつ。人が私の周りで死んでも、誰も私を疑わなかった。私は、自分が疑われないことを知っていた。誰も変わってしまった私を知らなかったし、私は変わってしまった自分を人に知られるようなことはしなかった。私はいつも人に見ら

れている自分を理解し、周りに望まれる自分を演じてきた。今まで、失敗したことはないし、これからも無いだろう。

私は何も間違ったことはしていない。邪魔になった人達を私の前から消してきただけだ。たとえば、それが昨日まで両親であったとしても。私は、明るい太陽の下を歩いているうちに、悩んでいたことがばからしくなった。何を悩んでいたのか不思議になった。ただ、彼等と私は、血がつながっていただけなのだ。そう思うと気が楽になった。私は立ち止まり空を見上げた。きれいな青空だった。そして、私は昨日まで両親だった死体の待っている家へと足を向け、再び歩き出した。

不幸

これは、ある不幸な男の物語。

あるところに、とつても唇の好きな大学生が住んでいました。彼は、人を唇で判断します。人の顔をちゃんと見てはいるのですが、あまり覚えていません。覚えているのはその人の唇が何色だったか、どんな形でどのくらいの大きさだったかなど、本当に唇のことしかその人について覚えていません。それでも彼は大学生になるまで人を間違えたことがありませんでした。

ある日、彼は、街を歩いていました。ただ、あてもなく人の唇を眺めながら散歩をしていたのです。昼食も食べ終わりそろそろ帰ろうという頃、ついに彼は見つけました。自分の理想の唇を持った人を。彼の夢は、理想の唇を持った女性を自分の奥さんにすることでした。彼は、狂喜しました。今まで二十数年間探し続けていた理想の唇をついに見つけたのです。彼はその人を見失わないようにつけていきました。今は、声をかけることができなくてもせめてその人について何か知りたいと思ったのです。彼は、その人について電車に乗り込みました。

彼は、電車に乗っている間ずっとその人の唇を見詰めていました。彼はその人の唇を見ているだけで幸せでした。一時間も乗っていたでしょうか、その人は小さな駅で降りました。彼も見失わないように急いで電車を降ります。駅から出たらまたばれないようにこっそりを後をつけていきます。その人はスーパーに入っていました。彼も中へ入ります。その人はトイレへ入っていくところでした。

そこで彼は気がつきました。その人が「男子トイレ」へ入っていたことに。そう、彼の理想の唇の持ち主は男性だったのです。彼はとてもショックを受けました。更に、もう一つ重大なことに気がついたのです。自分のまったく知らない土地へ来てしまったことに。彼は、困ってしまいました。更に悪いことに財布も落としてしまっ

たようです。まさに踏んだり蹴ったりでした。その後彼がどうなったかは知りませんが、まだ懲りずに理想の唇を追いかけているのでしょうか？

あなたはそんなことしませんよね？

死体

最近何も楽しいことが無いとぼやいている貴方へ

丁度十二時間前のことだよ。僕は自宅の電話で自分の訃報を聞かされたんだ。最初は自分の耳を疑ったし、電話をしてきた警察官だつて驚いていた。だって、普通はあり得ないことじゃ無い？自分が自分の訃報を聞かされるなんて。

だから、急いで飛んでいったよ、自分の死体があるっていう病院まで。

病院に着いてまたびっくりしたね。だって、自分がそこで死んだ様に眠っているんだもの。いや、死んでいるからその表現は正確じゃ無い。眠ったように死んでいるだ。まあ、今となつてはどつちでもいいことなただけ。

そこで、困ってしまった。だって、どう見たつてそこで死んでいるのは自分以外にあり得ないからね。指紋も歯形も身長も体重も何から何まで一緒なんだ。だって自分自身何だから、当たり前だよ。双子や兄弟はいないのかつて聞かれたけど、知っている限りそんなものは聞いたことが無いって答えてやった。で、わざわざ母親に電話までしたけど、事態を増々ヤヤコシクするだけだった。あれは失敗だったね。

本人が電話しているのに、息子が死んだつて大騒ぎしているんだ。本人の目の前でだよ。これも正確じゃ無いね。電話の前でだ。なんとか落ち着かせて、状況を説明して病院まで来てもらおうと思つたんだけど、物凄く骨の折れる仕事だったよ。

なんとかタクシーに乗つて来ることになつたら、自分の死体が見つかった経緯を聞くことを忘れていたつて思つて後ろで人の会話を聞いてクスクス笑っている警察官に聞いたんだ。この死体は何処にあつたんですかって。すると警察官は自分は知らないと言い出すん

だ。病院から連絡が来ただけだと。そこで、警察に電話をした人を探して死体は何処にあったのかと聞いてみたら、本人（死んだほうね）が自分でやって来たと言ったんだ。外来の待ち合い室で突然苦しみだしたと思ったら、死んじゃったってね。何となくその言い方がおかしくて、警察官と二人で大笑いしちゃった。人が一人死んでいるのにね。でも、死んだはずの本人（生きているほうね）がここにいるんだから、全然緊迫感というか悲壮感というかそういうの無かったのね。で、その死体が免許証を持っていたから誰か分かったって言った。でも、僕も免許証を持っているんだ。だって、病院まで車で来たからね。そして、死体を持っていた免許証を見せてもらおうとしたら、死体の持っていた免許証が見当たらないんだ。みんなで変だ変だと騒ぎながら探したけど、結局見つからずじまい。他にも死体を持っていた物がみんな見当たらないって、病院の職員が言い出したから、さあ大変。

あわや騒ぎが病院中へ広がるってところで、やっと母親の登場。母親は到着するなり、死体に取り付きオイオイ泣き出す始末。そして、やっと落ち着き、僕の顔を見るなり、あら元氣そうじゃないだつて。一体母親の頭の中はどうなっているんだろつて、きつとその場にいたみんなは思ったね。あの切り替えの速さはただものじゃなかったね。

結局、母親と警察官と病院職員と僕とでてんやわんやしているうちに死体も消えてなくなった。出入り口が一つしか無い病室で入り口前で4人で騒いでいたのに消えて無くなった。勿論、窓はしっかりと閉まっていたし、部屋は2階だし、窓のすぐ下は大通りで人通りも激しいから何かあったすぐ分かるはずだった。誰かが部屋に入っ出て出ていったはずもないから、ス時どうやって消えてしまったのか全く分からない。

死体の筈の本人（僕）はピンピンしてここにいるし、事件にしよつとも全く証拠になりそうな物が残ってなかった。残ったのは、狐につままれたような4人の顔とタクシーの領収書だけだった。

これが、丁度十二時間前に体験した不思議な出来事さ。それからどうしたって？

特に何もなかったよ。夕飯食べて、早めに寝たさ。何か疲れたからね。

鏡（習作〇一）

貴方にとって私は何時かと尋ねると、貴方は赤だと答えた。

では、貴方にとって私は何処かと尋ねると、貴方は弱いと答えた。

しかし、吸いたくもない煙草が目の前にあつたので一本取って火を付けた。

再び貴方にとって私は何かと尋ねると、貴方はそうだと答えた。

苦しかったので上着を着て、右手を差し出した。

貴方は私が速いと言ってきかない。

私は、紫煙に目を細め、夢の香りを嗅いだ。

何時しか、宵の帳が下りてきた。

人の心を確りと捉えることは難しい。

貴方にとっての赤は私にとっての青。

貴方にとっての白は私にとっての罪。

有罪か無罪。

宵闇か暁。

彼は誰。

私は何処にいるのか。

私は何時からいるのか。

私は誰。

脆いだけの常識を右手に、

悲しいだけの理性を左手に、

貴方は生きていくだけだ。

儂い夢の遣り香を楽しむことは悪なのか。

力が全ての世の中は何時しか心の中に。

狂おしい程愛おしい、

狂わしい程煩わしい、

感情の波は井戸の底。

私は、貴方にとっての過去であり未来。
私は、貴方にとっての此処であり彼方。
私は、貴方にとっての貴方であり自身。
吸いたくもない煙草は、煩わしい常識の象徴。
目を細める紫煙は、見たくもない貴方の心の鑑。

目を閉じ、夢に生きるのは罪。

現し世は、夜の夢では無い。

やっとの思いで手に入れた煙草は、とても硬かった。
あまりの寒さに私は、血の滴る肉片を一切れ頼張る。
あまりの震えに私は、上着を羽織り左手を差し出す。
苦しい時は過ぎ、優しい時は貴方の隣に立っている。
私は初めて貴方に問う。
貴方にとって私は何時なのかと。

左であると、貴方は答える。

私は、哀しむ。

何故、夜ではいけないのか。

何故、良しと言ってはくれないのか。

何れかの右手を取り、貴方は優しく口づける。
両の腕を抱き上げ、炎の中へと投げ入れる。
身を焦がす炎は、貴方の自信の瓦解。
優しい口づけは、何も救ってくれない。
優しい口づけは、只一時の気休め。
身を焦がす炎だけが、真実の痛み。

井戸の底から見上げる貴方は、何を見るか。

蒼い空か白い雲か輝く太陽か煌めく星か仄かな月か。
暗く冷たい地の底から貴方は何を見つめるのか。
人の英知か繁栄か墮落か崩壊か。

鏡に向かい私は問う。

貴方は私にとって何れかと。

私は夢の中。

鏡の中の私は、貴方。

私は、貴方。

ワインを一口、口に含む。

私が立っているのはどちら側。

夢の中の鏡の向こう。

夢を見続けるのは本当に罪なのだろうか。

永遠の間。

理由

つい最近のことである。

夢の中で私は、私を殺した。

であるから、私は殺人犯なのである。

しかし、私は私を訴えることが出来ない。

証拠の死体が無いからである。

従って勿論、加害者もいない。

しかし、やっぱり私は私を殺したのである。

殺された私は殺した私であり、

殺した私は殺された私である。

やっぱりどちらも私であるのだ。

私は生きているから、

殺した私なのだが、

殺されたのも私なので、

生きている私は、

やっぱり殺された私なのだ。

しかし、証拠の死体が無い以上、

私は私を訴えることが出来ない。

私は考えた。

証拠の死体を如何にして示すか。

私が生きている以上証拠は存在し得ない。

残る道はただ一つ、

再び私は私を殺すしか無い。

これが、此処に死体が存在する理由である。

これが、全てである。

ドアが開く（習作〇二）

古ぼけた木のドアを開け薄暗い階段室へと身体を滑り込ませ地面の下へと続いている狭い階段を下りきると目の前にもう一つの古ぼけたドアがありノブをつかみそつと回すとカチリと音がして向こう側へドアが開く。地表より下にある饅えた匂いの籠るその部屋から闇が漏れ出てきた気がするがそれは気のせいであらう。ドアをギツツと開き隙間から中を覗くが薄暗い階段室よりなお暗い部屋の中にすぐ目は慣れず一瞬目の前が暗くなるがそれも一瞬で8畳ほどの部屋の真中に置かれている会議机を囲むように座る幾人かの人の目がドアへ集まる。意を決してドアをガバツと開けて中に入るとドアに集まっていた視線が俺に集まり居心地が悪くなるがそれもあつという間に消え去つてドアを閉めると闇の中に一人取り残された俺がいる。再び闇に目が慣れると四角く置かれた会議机に男4人女3人の計7人が座つて俺を見ていることが判つたが誰も口をきかずこの部屋にいる8人全員がまるで石になつたかのようにただただ黙つて固まつているとドアから一番遠くに座っている一番年寄りで一番えらそうなババアがスツと右手を上げると今まで固まつていた全員がまるでスウイッチが入つたかのように動き出しババアが口を開く。

「ここは何処か」

質問の内容は予め聞いていたモノなので大して驚きはしなかつたがそのしわがれた声は予想を上回るモノで少しだけ怯んだがこの饅えた闇の中にはとても馴染む声かもしれないと思ひ直し俺は口を開く。

「地の下」

答えを聞いたババアは少しだけ目を細め取り巻き6人も目を細め厭らしく口を横に広げ脂に汚れた前歯をニツと見せ身振りでもドアに一番近いところにある空いている椅子を指差すが俺は見ない振りをしてただただ立ちすくみババアの次の声を待つ。

「この仕来りは知っているとと思うが、お前に資格が在ると証明できるか」

黙って立ったままその言葉を聞いていたがババアの後ろの壁の右上にある染みの形がイタリアの長靴型に似ているような気がして気になって気になって仕方がない俺はババアの問いに応えることを一瞬忘れていたが我に返った俺はリーバイスの右の尻のポケットに差し込んであった温くなったナイフを取り出しグツと握るとそのまま右の首筋に刃を当ててスツとナイフを滑らす。皮が裂け肉も避け血管も裂けどす黒い血が闇に包まれ饅えた匂いの籠る直方体の中に迸るがどんどん体温が下がって目の前が暗くなって意識が飛んで俺は自分が自分で無くなって空の彼方へ飛んでいく。

「空」

海岸をドライブしていると、あまりにも綺麗だったから、その夕日の空が欲しくなった。おもむろに車を止め、ハサミを取り出して一番のお気に入りの色を中心に四角く切り取る。切り取ったそれは、少し大きめのハンカチくらいの大きさだった。満足して、僕はそれを畳んでポケットに入れた。真四角に切り取られた空には、何も無い四角だけが残った。

帰ってから、ベッドに寝ころんで、僕は空の切れ端を取り出した。ハンカチほどの大きさの空は、暗くいくつかの星が瞬いていた。手に入れたと思っていたあの色を見ることが出来なかったから、僕がっかりしてしまった。

それでも、僕は時々、ハンカチほどの大きさの青空や夕焼けや雨雲や星空を取り出して眺める。そして、何もなくなつた四角い空を思い浮かべる。

(327文字)

「交差点」

交差点の角にぼうつと立っている男の人に声を掛けた。彼は恋人を待っていると言った。でも待ち合わせの場所へ向かう途中、ここで車に撥ねられたのだと。

彼に別れを告げ、交差点を渡る。

交差点の角にぼうつと立っている女の人に声を掛けた。彼女は恋人を捜していると答えた。恋人の死んだ場所へ向かう途中、ここで車に撥ねられたのだと。

後を振り返る。まだ、男はぼうつと立っている。

二度と逢うことが出来ない彼らを想うと少し悲しくなった。

(205文字)

「子猫」

朝、ドアを開けると雨が降っていた。傘を広げて歩道を歩き出したけど、骨しか残ってなくて、雨にたっぷりと濡れた。

バス停には誰もいなくて、バスは30分も遅れてやってきた。乗り込んで乗客は自分一人。渋滞もしていないのに、目的地まで予定の3倍も時間がかかった。目的地で降りようと思って財布の中を見ると、小銭が入ってなかった。

「200円。小銭が無ければ1000円。」
言われたとおり、千円札を出した。

骨だけの傘を差して、通りに出ると大木の下に段ボールがあつて子猫が入っていた。お腹が空いていそうだったので、カバンからビスケットを出した。

背後をバスが走り抜けていって、頭から泥水を被った。

世の中、理不尽なことばかりだ。

箱の中で、子猫がミャアと鳴いた。

(320文字)

「アルバイト」

木になって、3日経った。かなり暇だし、キツツキには閉口した。あと、散歩中の犬。足下が臭くなつて仕方がない。

アルバイト情報誌でそれを見つけたのが、4日前。

「立っているだけで、高収入」

最初、それを見つけたときは喜んだものだった。早速、履歴書を買い込んで電話をして、その日の内に面接。

でも、面接に言ったら開口一番、「あなたには華が足りませんね。もう少し華があれば、桜やライラックなんかも出来るんですが。だって。色々と資料を見せられたけど、結局少し色が白いからって。あなたはシラカバですね。」

確かに、ポプラには背が足りないし、華が足りないから花が咲く木は無理だけど、一方的に決めつけられるのも何だかね。

確かに割はいいけど、立っているだけってこんなに暇なものだとは思わなかった。これなら、こんな公園に立ってないで、観光地で松にでもなつていれば良かった。

あと、4日何をしようかな。

(382文字)

「食卓」

ベッドで寝ていたら、突然神様が降りてきて枕元に立ち、「すまん、間違えておったわい。おまえは、人間じゃなくて牛になる予定だった。すぐに修正するからな」と言われた。

「え、牛って胃袋4つあるんでしょ。それに臭いからイヤ」と言った瞬間には、草っ原で草をはむはむ食んでいた。ちよつと、いきなりすぎないかと思っただけど、お腹が空いていて面倒くさくなつて考えるのをやめた。考えるのをやめると、それはそれで楽だと思えてきた。

暫く、草を食べるだけの毎日だったのに、また、神様が降りてきて草っ原にすつくと立った。

「すまん。また間違えたわい。おまえさん、本当はカエルだった。すぐに修正するからな」と言われた。

「え、カエルって皮膚がじゅめじゅめしてるじゃん。それに泳げないし、また格下げかよ」と言っただ瞬間には、池の中ですいすい泳いでいた。本当にいきなりだなと思っただけど、自然に泳げていたから気持ちよくなつて考えるのをやめた。難しく考えなければ、やつぱり楽だと思えてきた。

暫く、泳いで虫を食べるだけの毎日だったのに、やつぱり神様が降りてきて、「本当にすまん。今度こそ最後だからな。」「またかよ、今度は何だ、と思っただいたら、「本当は、マグロだったようじゃ。では、早速修正するからな。」

「え、マグロって泳ぐのやめたら死んじゃうんでしょ。めんどくさがりだから厳しいなあ。それに今度は格下げ、格上げ？」と言っただ瞬間には、もう大海原を、他のマグロに囲まれて泳いでいた。

今度は気持ちが悪くなる前に釣り上げられて、加工されて何処かの食卓にのぼってしまった。箸を持っているやつを見ると、元の自分だった。

(680文字)

「トイレ」

湯船にお湯を張り、服を脱ぎ、脱いだ服を綺麗に畳んだ。綺麗に身体と髪を洗い、湯船につかる。覚悟を決めて、剃刀を右手に持って、左手首に当てる。すうっと引くと、手首に線が入った。じっと見ていると、血が出てきた。やっと楽になれると思った瞬間、それは突然やってきた。もよおしてしまったのだ、それも大の方。最後にとたらふく食った西瓜が悪かったのかと思っただが、発見された状況を思うと、情けなくなってきた。便の浮かんだ湯船で発見されたくない。慌てて、風呂場から出ると、手首を押さえたままトイレに駆け込むか、救急車を呼ぶか悩んでしまった。

血はどんどん出てくる。背に腹は替えられぬとまずトイレに行くことにした。急いでトイレに駆け込み、便座に腰を降ろしてまでは良かったが、トイレトペーパーを切らしていたことに気がついた。死を覚悟したはずなのにこの絶望感。自分が情けなくなってきたが、結局意識が薄れてきてしまった。最後に思ったことは、床の上で漏らしたくないな、だった。

(423文字)

「唇」

私の理想の唇を持っている人はもういないと諦めかけたとき、その人は突然わたしの目の前に現れた。それはデパートの中で買い物をしているときだった。私は喜びに身を震わせ、その人の唇に見入ってしまった。やっと、理想の唇を持った女性に会えたと思ったのだ。

その人に、ばれないように私は尾行を始めた。少なくとも住んでいる場所を知りたいと思ったのだ。その人は、デパートを出ると、真っ直ぐに駅に向かった。券売機で切符を買っている。私も適当に目星をつけ、切符を買ってその人の後を追った。電車に乗り込んで、車輦の端の方でこっそりとその唇を眺め続けた。思いのほか早くその人は、電車を降りた。切符代は少し無駄になったけど、大した事ではないと思い直し、再び尾行を開始した。

住宅街の中を歩いているとき、その人は公園に入っていた。私は、その人を追いかけていった。そして、その人は公衆トイレの中に入った。

追いかけてようとして、私は気がついてしまった。

その人は、男子トイレの中に入っていたことに。

私は、本当にがっかりした。結局、私は唇しか見ていなかったのだ。

(461文字)

「脱皮」

廊下に、女性もののジャケットが落ちていた。先を見ると、3メートルほど進んだところに、今度はブラウスが落ちていた。さらに、3メートル先には、スカート。私はそれらを拾って廊下を進んだ。廊下の角を曲がると、今度はハイヒールが片方落ちていた。階段の前には、もう一つのハイヒール。下の踊り場にはストッキング。私は階段を降りた。階段を降りたところには、キャミソール。さらに、先には点々と、下着が落ちていた。最後の下着は、会議室の前に落ちていた。そして、少しドアが開いていた。

私は、好奇心を抑えきれずそつと中を覗いた。

そこは

(255文字)

「自動販売機」

ある日、自宅に近くに自動販売機が出来ていた。真っ白で文字は何も書いていない。ジュースの代わりに並んでいるのは、5センチ四方のカラフルな箱。値段はそれぞれ違って100円から200万円まで。でも、結局何の販売機なのかしばらくわからなかった。

それが何の自動販売機なのかわかったのは、2年付き合っていた彼女に降られてとぼとぼと歩いているときだった。真っ白だった自動販売機に真っ赤な文字で「愛の自動販売機」と書かれていた。

あまりの胡散臭さに、その時は気にもしないでそのまま帰った。でも、それ以来毎日その自動販売機の前を通ると嫌でも「愛の自動販売機」の文字が目に入ってきた。

そんなある日、つい「愛の自動販売機」に100円玉を入れてしまった。一番安い箱のボタンを押したけど何も出て来なかった。何が入っているのか気になっていたら、少しがっかりしたけど期待もしていなかったから、100円を落としてしまったのだと思いきみ家に帰った。

新しい彼女が出来たのは、それから2日後だった。

彼女が出来たとたんに、あの自動販売機は真っ白に戻ってしまった。

その彼女とも結婚して子供ができそこそこ幸せに暮らしている。でも、あの時もつと高い箱を買っていたらどうなっていたのか。今でも真っ白い自動販売機を横目に考えることがある。

(544文字)

「月」

右手に大きな満月が見える。明るい月の光を浴びながら私は歩き続ける。もうかなり長い間歩き続けている気がする。一ヶ月か、二ヶ月か。もつと長いかもしれない。休むことなく歩き続けていることが私に一つの事実を突きつける。

思い出したくない光景。

まだ認めたくない事実。

それでも、いつかこうなることはわかっていた。

私は事実を受け入れる代わりに逃げ出すことを選んだ。いつかは受け入れなくてはならないと心のどこかでは思っている。でも、まだ受け入れられなかった。

それを認めたら自分が壊れてしまいそうだった。

右にあった月もだいぶ沈んでしまった。やはり休もう。太陽が昇ってきたら。

長い間歩き続けた。そろそろ休んでもいい頃かもしれない。

身体はとづくに無いから、ほとんど疲れてはいないけど。

自分の死を受け入れなければまだしばらく歩き続けられるだろう。そろそろ、左に太陽が見えてくるだろう。少し休んだら、また歩き出そう。

まだ迎えは来ないだろう、自分の死を受け入れなければ。

(420文字)

しあわせ

「赤」は、小さな村に住んでいる。とても豊かな土地にその村はあるが、人口は三十人にも満たない。両親はともに健在で、村人たちも優しい。村の周りは深い森と険しい山に囲まれているので、外の世界のことはあまり知らない。

でも、「赤」は幸せだと思っている。

「青」は生まれてからずっとベッドの上で生きてきた。でも、TVもあるし、インターネットもある。欲しいものは全て与えてもらってきた。直接知っている場所は、この病室と窓から見える風景だけ。直接知っている人も、父さんとお医者様と看護婦さんだけ。この部屋から出たことはないけど、外の世界のこととは、何でも知っている。

外の正解に想いを馳せているとき、「青」はとても幸せだと思っている。

「白」は、大学をサボってドライブに行った。可愛い彼女もいるし、親からたつぷり小遣いを貰っている。知りたいことは大抵知ることが出来るし、欲しいものも大抵手に入る。将来もそこその企業に就職できるだろう。特に不満も不安もない。

でも、「白」はいつでもつまらないと感じている。

結局、誰が一番幸せなのだろう。

しあわせ（後書き）

世界を知らずに現状で満たされる。

手の届かない世界に想いを馳せる。

そこそこ不満も不安もなく生きる。

どれが一番幸せなのだろう。

そもそも幸せって何だろう。

そんなことを考えている自分が一番幸せなのかもしれない。

とも

アンデスは、小さい頃から友人が沢山いた。家にいるとき以外、一人でいた事が無いくらいだ。今でも増え続けている。自分は多くの友人達に支えられているといつでも感じていた。でも、いつでも一つの不安がある。もし友人達がいなくなったら、自分はどうなってしまうのだろうか。友人が一人もいない自分はどんな自分なのだろう。どうやって生きていけばいいのだろうか。その不安を忘れるために、今日もアンデスは友人達と遊びに行く。

ヒマラヤは、小さい頃から友人という存在は一人もいなかった。家にも、外出していても、自分の周りに多くの子供や大人達があった。コミュニケーションに問題は無いはずなのに、未だに友人というものは出来なかった。でも、ヒマラヤは特に気にしてはいなかった。人は結局は一人だと信じているからだ。社会の中で、人と接することは多いが、あえて友人を作る必要性を感じなかった。それに友人が出来たとしてもどう接して行けばいいのかわからなかった。ロッキーは、小さい頃から大事な大事な親友が一人いた。いつも二人は一緒だった。二人とも友人は沢山いたが、大事なものはお互いだけだった。二人の関係は、死ぬまで変わらないと信じている。でも、最近小さな不安が出来た。親友が冷たくなってきた気がするのだ。親友さえいてくれれば、それでいいと思っていたロッキーは、親友を失うのがとても恐ろしかった。親友一人と多くの友人達。釣り合うことはあるのだろうか。

とも（後書き）

「友」とは何か？「友」は必要か？「親友」と「友人」と「知人」と「他人」の違いは？

「友」と「恋人」の違いは？

「人」は一人では生きていけないと言うけど本当なのか。

「一人の親友」と「沢山の友人」、大事なのはどちらか。

社会というシステムは「友」をどのように定義するのか。

疑問は尽きないし、答えも出ない。

出したくない、かもしれない。

偶然

空男は、偶然入った喫茶店で大学時代の友人に会った。空男は大学時代、彼女のことを好きだった。彼女も自分を好きだったかもしれないと思っていたが、結局何もなまま、大学を卒業して、離ればなれになった。懐かしさと、少しの嬉しさで、空男はちよっぴり饒舌になった。卒業式の日、別れ際の何か言いたげだった彼女の顔を思い出した。

海子は、意を決して彼が入った喫茶店のドアを開けた。大学時代から好きだった彼のことは、友人達を通して情報を集めていた。相手も好意を持っていたことを知っているし、この二年間恋人がいなかったことも知っている。再開する機会をずっと窺っていた海子は最後のチャンスだと思つて、空男に会うことにした。友人のと約束が急にキャンセルになったため一人で歩いているとき、彼を見かけたからだつた。偶然を装つて海子は彼に話しかけた。

大地は、大学時代の友人から結婚の知らせを受け取った。相手も大学時代の友人だった。大地は恋人の話を思い出した。彼の恋人も大学時代から二人のことを知っていた。大地の恋人、星子と海子は友人だった。ある日、海子と待ち合わせていた星子は待ち合わせ場所の近くで空男を見かけたらしい。海子の気持ちを知っていた星子は二人が出会えることを願つて待ち合わせをキャンセルした。星子の願いが通じて、二人は出会えたのだろうか。

大地は、この結婚は偶然だったのか、必然だったのかと考えた。

偶然（後書き）

人間は「偶然」という言葉が好きなのだと思う。本当は、偶然なんて無いのに、偶然だと思いきみたくいのかもしれない。この世界では、起こることは起こるし、起こらないことは起こらない。だから、偶然は「偶然」起こったのではなく、起こるべくして起こったのだ。

つまり、「偶然」＝「必然」。

「偶然」起こったのか、「必然」的に起こったのかは、受け取る人次第だと思う。

でも、一つだけ「偶然」起こったことは、僕がこの世に生まれてきたことだろう。

創造主

神様は、空と大地、昼と夜、生き物を創った。この世の誕生である。しかし、神様はまだ何かが足りないと感じた。そこで、神様は自分の息子と娘をその世界に住ませた。これが、人間の始祖である。世界の出来に満足した神様は、急に自分の創った世界に興味を失った。神様は次に何を創ろうかと考えながら、眠りにつくことにした。

それから時は経ち、この世界は人間達によってどんどん占領されていった。そして、人間達は自らの仲間を殺し、世界を壊していった。

人間達の愚行を嘆いた一人の少女は祈った。

「神様、もしいらっしゃるのなら、あなたの子ども達をお救い下さい。」

しかし、世界を創ることで満足してしまった神様は、一人歩きを始めた自分の作品にもう興味は無かった。

創造主（後書き）

人にもよるだろうが、クリエイターと呼ばれる人たちは、一度創ったもの（作品）に対してすでに興味を失っている事が多い。それは、何故だろうか。創る過程こそが、作品の本質だからだろうか。もちろん、他人の目に触れるものに対しては、少し気になる場合もあるが、それはその作品に対する評価が今後の創作に生かせるかもしれないからであり、その作品に対する評価そのものには興味は無いはずである。

結局、一人歩きを始めた作品に対して、創造主は何も感じないのである。

完成したら、これまで。完成したものに対してエネルギーを注ぐよりは、新しいものを産み出した方が何倍もエキサイティングなのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5963r/>

ぱらのいあ

2011年3月16日06時31分発行